本から読み解く今の子ども――第三回

「物語」の必要と不必要について

明星大学　宮川　健郎

ぼくの母親の名前は、ヨウコという。

ぼくは小さいときから、ヨウコが母親だと教えられてきた。

ヨウコは、茶色い毛並みのきれいな、犬だった。

これは、昨年刊の**草野たき**『**ハーフ**』の冒頭。「ぼく」は、ものごころついたころから、父さんに犬のヨウコが母親だといわれて育った。つまり、「ぼく」は、人間と犬とのハーフだというのだ。作品の中ごろで、そのヨウコがいなくなり、父さんと「ぼく」は、必死でさがす。父さんは、会社にも行かなくなる。そのさなか、「ぼく」は、とうとう、おばさんの家をたずね、「本当の母さん」のことを聞き出す。まだ二十歳だった「本当の母さん」は、「ぼく」を産んですぐ家を出ていってしまった。「ごめんなさい。わたし、じしんがありません。」という手紙をのこして。母さんをさがしまわった父さんは、半年後、「ヨウコが帰ってきました」といって犬を連れてあらわれたという。「本当の母さん」も、ヨウコという名前だったのだ。

妻をうしなった『ハーフ』の父さんには、現実の空洞を埋めて何とか生きるために、「物語」が必要だったのだろう。しかし、その「物語」は、もう六年生になった「ぼく」を息苦しくもさせている。「ぼく」にはもう、「物語」が不必要になったのかもしれない。犬のヨウコは、十日以上もたって発見される

『**ハーフ**』
草野たき／ポプラ社／2006年

が、すっかり体が弱っていて、やがて亡くなる。作品のおしまいで、ヨウコを亡くした「ぼく」と父さんは、ヨウコという「物語」抜きではじめて向き合うことになるのだ。

『ハーフ』は、「物語」の必要と不必要について考えさせられる作品だけれど、作者は、つづいて『**教室の祭り**』を刊行した。主人公は、小学五年生の澄子だ。愛称で呼び合い（カコースミ）、「グッド、モーニーン！」と合言葉を言い合う「友だち物語」は、友だち／友だちではない、という差別を生み出し、それは、「いじめ」へとつながっていく。作品は、主人公が、この「物語」を抜け出すまでを描く。彼女が友だちとの新しいつながりを得る結末には、大きなカタルシスがあった。

『**教室の祭り**』
草野たき＝作／北見葉胡＝絵
岩崎書店／2006年

みやかわ　たけお　日本児童文学専攻。著書に『現代児童文学の語るもの』（日本放送出版協会）など。